2005 年 10 月 27 日（木）　　第 32 回研究会

●発表者：ボルジギン・ブレンサイン氏（本学 COE アドヴァイザー）
●発表題目：「東洋文庫所蔵“北京ウンドゥル王府モンゴル語文書記録帳写本”の史料的可能性」

本研究会においては、二十世紀前半期において内モンゴル東部地域の有力王公の一人であったウンドゥル親王ヤンサンジャブが一九二〇年代に北京にあった自らの王府に滞在中各地に出したモンゴル文書簡の写しであり、昭和九年に東洋文庫所蔵におさめられ今日に至っている『北京ウンドゥル王府モンゴル語文書記録帳写本』を対象として、発表が行われた。

まず第一に、問題提起として、内モンゴルや中国では決して見ることのできないこの写本を本格的に研究し、同王が北京に持つ王府の跡地及び彼の地元である内モンゴル自治区のホルチン左翼中旗で裏付け調査をし、その背景を明らかにして、文献全体の内容がモンゴル近現代史研究にどのような地位を占めるべきかを検討することは、日本に渡って約一世紀近く経っているこの貴重な文献にとっては先送りできない問題である、ということが指摘された。

第二に、ジリム盟ホルチン左翼中旗（ダルハン旗）の閑散親王であったウンドゥル王ヤンサンジャブについて、その職歴及び「満洲事変」勃発後の動向が紹介されると同時に、清朝時代の内モンゴルにおける 6 盟 49 ジャサック旗に関する解説が行われた。

第三に、文献の概要として、1964 年に東洋文庫と THE UNIVERSITY OF WASHINGTON PRESS から発行された『CATALOGUE OF THE MANCHU-MONGOL SECTION OF THE TOYO BUNKO』におけるモンゴル語で書かれた著者不明の「公文書記録帳」のようなタイトルの文献のうち、昭和９年に東洋文庫に入庫したジリム盟ホルチン左翼中旗の閑散ウンドゥル親王ヤンサンジャブの北京における王府から出された公私書簡の記録帳のコレクションを８つの構成部分に分けて、解説が行われた。

第四に、その内容について、実際に文書を引用しながら、①民国期における東部モンゴル旗の旗内事情、②駐京王公界の諸問題、③内モンゴル王公とチベット佛教界との関係、という概ね３つの歴史的事実が割り出された。

そして最後に、この文書から、農地化にさらされ、後ろ盾である清朝の崩壊によって、モンゴル王公の特権が徐々に廃止されていく民国時代における一人のモンゴル王家の没落の姿が浮き彫りにされていること、王家の財政状況からも、この時期にモンゴル旗が直面していた各種の問題は、清朝時代の旧体制のままでは抱えきれない状況に追い込まれ、旗自体が存続の危機にさらされていたことが窺われること、が指摘された。

以上の発表後、参加した多数の研究者及びモンゴル人留学生から様々な質問が出され、非常に活発な議論が交わされた。